

眠る恋人

古びた時計が差す時刻は、零時をとうに回っていた。

振り子の音だけがこちこちと、大本堂に小さく響く。

蒼泉がひよこ柄の半纏を着た翼彩の肩を抱き、懐中電灯を照らしながら、音を立てないよう、障子を静かに開ける。

室内は真つ暗ではなく、LEDの常夜灯が、ガーデンの本尊である持蓮観音像の祀られた巨大な仏壇を、赤銅色に浮かび上がらせていた。聞くところによると、常夜灯が点いているのは安全のためではなく、Li-fiという光無線LANが設置されているからだという。

リリイたちは在学中、スマホも預けてあるのに、阿闍梨さまたちはネット使い放題でずるいな、と思いつながら、翼彩は本堂内を覗き込む。

冬の京都は底冷えのする寒さで、山寺であるこのガーデンの大本堂も例外ではないはずなのだが、今日に限っては驚くほど暖かった。どうやら、空調がつけっ放しになっているようだ。

鹿野苑高等女学園の中心部である大本堂では、数時間前まで鬼獣供養、つまりヒュージの供養が行われていた。

仏壇の前には、細かく日付が書かれた大卒塔婆が立てかけてある。

夜が明ければ、大晦日の除夜法要の準備のため、大卒塔婆は供養碑に移されてしまっただろう。

翼彩は、そうなる前に——あのヒュージを供養しておきたかった。

だから、騒がしい八部衆が各々の部屋に戻り、ようやく寝ようかと言う時に、蒼泉にわがままを言つて、大本堂へ一緒に来てもらったのだ。

風邪がぶり返してしまう、と蒼泉は最初反対していたのだが、お願いだからと懇願するとひととおり困つたあと、半纏を羽織ること、具合が悪くなつたら即中断して帰ることを条件にして、渋々だが承諾してくれた。一応自室から出るので、ワンピースに袈裟懸けの、いつもの制服に着替え直した。

下手をすれば自分も風邪を引いてしまうくらいに寒いだろうと考えて、蒼泉も半纏を着て来たのだが、そのあまりの暖かさに二人とも拍子抜けしてしまつた。

蒼泉が、口に人差し指を当てる。

「さて、翼彩様は病身なうえに厳重注意期間中です——バレないよう、静かに行動しましょう」
「かに行動作戦、だね。わたしはえび行動作戦のほうがいいな」

どうも一瞬意志の疎通が取れなかつたような気がしたが、昨日今日に始まつたことではないので、蒼泉は気にしないことにして、畳敷きの床に細い脚を踏み入れる。

くしゃりと何かを踏んだ音が聞こえた。
足許にあつた、紙らしきものを拾う。

字が書いてありますと言つて、懐中電灯の光を紙に当てる。

「翼彩はん 蒼泉はん

大本堂の空調を消し忘れてしまいました

消しといて下さい

合掌

蒼泉は翼彩と顔を見合わせたあと。

「こんなに矛盾した内容の書き置き、初めて見ました」

黙認ということですね——と、一応控えめな声でささやく。

「かに行動作戦、円覚さまに破れたり——って感じだね」

口に握り拳の掌底を当てて、くすすす、と笑った。

本堂に常夜灯が点いているものの、天井は高く、光が床まで届ききっていないような気がして、自由に動きまわるにはあまりにも心許ないので、翼彩は焼香の横にあったライターで、燭台の蝋燭に火を灯す。竈の火もガスコンロも点けられなかったが、ライターの扱いだけはここで教わっていた。

ひよつとしたら大本堂からライターさえ持つてくれば、一連の失態は回避できたのかもしれないという考えが一瞬頭をよぎったが、三歩歩いたら忘れてしまった。

その間に、部屋の隅に積まれている座布団をふたつ蒼泉が持つてきて、仏壇の前に置き、翼彩と一緒に正座する。

改めて、大卒塔婆に書かれたヒュージの尋常ならざる数に圧倒される。

こんな数の化け物が全国に襲つてきていたなんて。

こんな数の化け物を殺生——いや、調伏せしめてきたなんて。

以前、円覚が言っていたことを、翼彩は思い出した。

人々を苦しめたヒュージであっても、死ねば仏の弟子となれるよう供養するのが僧の務め、鹿野苑のリリイ

の使命である——と。

なんて尊く、慈悲深いお考えなんだろう——と、心が強く揺さぶられたのを覚えている。

翼彩と蒼泉は目を合わせて頷き合い、蝟燭の火を線香に移し、手で仰いで火を消す。ふわっと白檀の香りが上がる線香を立て、鈴を二度鳴らし、左手の数珠をこすりながら金剛合掌をする。

簡素ではありますが、私が——と言い、蒼泉が小さな澄んだ声で般若心経はんにやんぎょうを唱える。

観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空

度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色

受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨

不增不減 是故空中

無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法

無眼界 乃至無意識界 無無明亦 無無明尽

乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得

以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故

心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪

能除一切苦 真實不虛 故説般若波羅蜜多呪 即説呪曰

羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

般若心経

また鈴を二度鳴らして、光明真言を三回ほど唱える。

おん あぼきや べいろしゃのう まかぼだら まに
はんどま じんばら はらばりたや うん

最後にまた鈴を二度鳴らし、数珠をこすりながら合掌する。

「あのヒュージは、どこまで晶良さんだったのかな」

翼彩が小首を傾げ、右に座る蒼泉を見る。

「——私の見立てでは、晶良さんは養分でしかなかったと思います。生前の人間の意識なんか吸収出来ないでしょう」

翼彩は安心した。そんな答えを期待していた。

「志妙尼様を襲わなかったのは、ヒュージが晶良さんだったからではなく、ヒュージが誕生した時に彼女がいたことで、保護者であるというインプリンティング——刷り込みがされたのではないかと」

「少なくとも志妙尼様の言うような転生なんて、考えられません——と、響かない声量でつぶやいた。

「でも、常識をひっくり返すのがヒュージだから、これからどんな新種が出てくるか、ちよつとわかんないよね——」

「どんな新種が現れても、人間には知恵と、人を思い遣る気持ちがありますから——結構強いです」

少なくとも翼彩様は、私がお護りしますと蒼泉が言った。

その無表情な横顔は、誇らしそうに見えた。

そうだと翼彩がもしもじしたあと、言いづらそうに口を開く。

「わたしね、隠されてまだ出てきてないヒュージ、知ってるんだ」

「えっ——」

突然の発言に、蒼泉が息を呑む。

「多分こう——巨大な手のある化け物みたいなやつなの。昔から『光明真言』にその名前が読み込まれていたことに、さつきみずみずが唱えてたとき気づいたの」

光明真言の暗号ってやつ？ と、付け足す翼彩に、蒼泉は急激に会話の知能レベルがしゆるしゆると落ちる何かを感じて、そのヒュージはんは何ていう名前ですか？ と訊いてみる。

翼彩はもしもじした挙句。

「多分だけど——『ハンド魔神』っていうの」

とつぶやく。

蒼泉は、『光明真言』の「ほんどま じんばら」の部分ですか、と聞くと、なんでわかったの!? と翼彩が目を丸くして驚く。

蒼泉が翼彩の膝をぴしゃりと叩いて、ハンド魔神は出えしまへん——と言いつけさせる。

翼彩が、えっ——？ と動揺しているので、もう一度強調する。

「ハンド魔神は、出えしまへん」

さあ移動しましょうと言つて、蒼泉は翼彩に肩を貸しながら立ち上がる。翼彩はもう大丈夫——と、肩を借りながらも、なるべく蒼泉に体重の負担をかけないように立ち上がつて微笑んだ。

常夜灯の醸し出すオレンジ色の闇に包まれた本堂を見上げながら、長押ながしの線に沿つて懐中電灯の光を走らせる。

仏壇から見て西側隔つこの長押に、四角い反射物が架けられている。

「あ——あれじゃないですか？」

平坦な畳敷きではあるが、転ばないように足許を照らしてゆつくりと近寄る。

見上げるとそこには——花嫁たちのムカサリ絵馬が、ひっそりと架けられていた。

「あつた——良かった」

決して目立つ所ではないけれど。

誰もが気づくものではないけれど。

許されなかつた恋いの花が、やつと可憐に咲いたのだ。

あのさ、みずみず——と、翼彩が頼りなさげな声で呼びかける。

「庵主さまと晶良さんの暮らしを壊しちゃつたのつて、わたしたちなんだよね」

蒼泉は優しく諭すような無表情で、そうですよ、と頷く。

翼彩は下唇を噛んで、少し項垂れる。

「翼彩様——しょんぼりしないで下さい。あの方の暮らしは、本来十六年前に解体されてなければいけなかつたんです。むしろ一年でも一日でも早く、あの歪いびつな暮らしを解体できたことに、二人で感謝しましょう」

そう言うのと、ムカサリ絵馬に向かい——一緒に深く礼拝らいはいをした。

これで晴れて奉納が済み、志げと晶良の結婚は、寺として祝福された形となった。語り継ぐごうね、みずみず——と翼彩が言った。

「そうですね。さしずめ——『舞鶴迎去り心中』といったところでしようか」

翼彩はしばし蒼泉の横顔を見つめたあと、感激のため息をつく。

「悲しいけど、なんか文学的で綺麗なタイトルだね。スゴイ、みずみず」

不謹慎でした、と明後日の方を向く蒼泉の背中に、翼彩は微笑みかけた、

——不謹慎な気持ちで言ったんじゃない。花嫁たちへの情感、そして確かな共感が言葉となって、蒼泉の優しい口唇をつたってこぼれたんだ。

翼彩にはそう思えてならなかったけれど、何も言わないことにした。

頭を上げて、懐中電灯でムカサリ絵馬の顔を見る。

顔のコラーージュだけピントがぼけているところが、なんだか花嫁衣装を着こなせなかったみたいで、今となつては少し憐憫を感じる。

黒目勝ちで微笑んでいる、志妙尼こと志げさんの写真。

生気の抜けたような表情の晶良さんの写真——。

あれ？

晶良さんの写真が、笑っている。

みずみず、ちよつちよつ、見て見て——と言って晶良の顔を指差しながら、翼彩が目を擦る。

蒼泉も懐中電灯の光を当てて、晶良の表情を確認する。

「これって、ひよつとして——」

翼彩が心靈現象を表すポーズを創作しようとするが、いいアイデアが出ず、額に三角形を作った辺りで、蒼泉は気のせいですね、と即答した。

「彼女の写真はもともと読み取りの難しい表情をされてました。もし今笑顔に見えるのなら、それは私たちがヒュージを討伐したことによる達成感が、脳に暗示を与えてそう見せているんです」

みずみずすごいね、脅威の脳科学スペシャルくんや徹底解剖って感じだね、——と深く頷いたあと、翼彩はふたたび晶良の顔を見つめる。

蒼泉は、なんだか申し訳なさそうな無表情で翼彩を見た。ファンタジックな幻想を壊してしまった気分になってしまったから。

「そうだよね。自分でもなんとなくわかってるから」

翼彩は、両手で制服の襟を正しながら、もしも——と想いを巡らせた。

——もしも、亡くなった人が戻ってきて。

楽に死ねましたよ、心残りはありませんよ、今はお浄土で幸せにしていますよ、と言って、自分の遺影を笑顔に更新してくれるなら、遺された人はどんなに幸福で、どんなに救われて、どんなに都合がいいことだろう。そんなことを考えながら高所を見上げすぎていたのか、翼彩は、わわっ——と短く声を発して、ふらりとバランスを崩し、後ろに倒れそうになる。

大丈夫ですか、とすかさず蒼泉が後ろから翼彩の肩を掴む。翼彩はそのまま膝の力を失って、常夜灯の僅かな光のなか、夕暮れを反射する川面のような色の髪をした天女さまに支えられながら、畳の上へゆつくりと仰向けにしてもらう。

「ありがとうね、みずみず。ちよつとくらくらしちやつて」

蒼泉は、まだ病み上がりですから少し休憩しましょうね——と言いながら自分も膝を降ろして、翼彩の座布団を二つに折り、ショートヘアの頭をそつと持ち上げて、枕代わりに隙間に差し込む。

「面白い——まだ眼が回ってる——」

翼彩の視界では、本堂の天井が反時計回りに約九十度ほど回り、回りきつたらまた戻って九十度回り——という目眩が続いていた。

そんな回転する薄暗がりの視界に、蒼泉が現れて。

二人の前髪を上げて、額と額をくつつける。

「あっ——」

「一応熱は下がってますね、よかった」

そう言う蒼泉は、仰向けで寝る翼彩の右手側に、自分の座布団を引き寄せて折りたたみ、両腕に抱え込んで隣でうつ伏せる。

少し安心したように翼彩の顔を見る蒼泉の瞳には、小さな蠟燭の火が写り込んでいた。

——いつものように自分の網膜の底の底を見ている。

——仲直りしたあとだからか、なんだか今日は、網膜の底の底を抜けて、なんだか脳が一番恥ずかしいことを考えている部位を覗かれていますみたい。

——みずみずつて凄い。こんなに安心させてくれる人も、こんなにドキドキさせてくれる人も、みずみずしくない。

——これが阿吽の陣っていうものなんだろうか。

——庵主さまたちも、こんな素敵な阿吽の陣だったんだろうか。

翼彩は、志げと晶良の二人と、自分たちを重ねてみた。

もし、みずみずが死んでしまつたら——わたしならどうするだろう。

ふと、そんな事を想像してみた。

——泣きわめいて、衰弱死してしまうだろうか。

——まあ、そこは衰弱死しなかつたという設定で考えるとして。

——小さくてもいいから気持ちを含めたお葬式をあげて、できればわたしが読経をして、お花に包まれた真つ白な頬を撫でて、茶毘だびに付されるのをべしよべしよ泣きながら見送つて、お墓を立てて、なんとか院みずみずみたいな戒名を作つて、卒塔婆を立てて、みずみずが退屈しないように四季折々の花を持つて、みずみずのお墓とお話をしよう——。

今日はこんなことがあつたよ、とか。

お萩を作つたから一緒に食べようね、とか。

本当は淋しいんだよ、とか。

ずつとずつと淋しいんだよ、とか。

頼まれもしない想像をしているうちに、涙が溢れてきた。

蒼泉は、膝で泣き出した翼彩の涙の理由も聞かないまま、柔らかいシヨートヘアをゆつくりと撫でた。

ねえ——と翼彩が頭をあげる。

「逆に、つーがね——」

逆につてなんですかと訊く蒼泉に、あ、違くて——と取り消す。

「つーがね、もし死んじやつたらどうする？」

「死なないように、命がけでお護りします」

蒼泉は即答した。

「それでも死んじやったら？」

泣いてくれるんだらうか——。

弔ってくれるんだらうか——。

もしかしたら、志げさんのように——。

蒼泉は、慈愛があるのかないのかわからない無表情で。

「——食べてしまいます」

翼彩の髪を撫で分けて——薄桃色の耳元にささやいた。

吃驚して、振り子時計の音が止まったように感じた。

「そうすれば——私と翼彩様は一緒にになります」

そう言つて蒼泉は、仄かに笑みを浮かべたあと。

下目遣いで、夜叉ですから——と付け加える。

常夜灯と蠟燭の醸し出すオレンジ色の世界で、蒼泉はうつ伏せのまま頬杖をついて、嘘です——と屈託なく微笑んでいた。

その瞳に小さく映る蠟燭の火を見て。

翼彩は、あつ——と、か細い声をあげた。

——やっとわかった。

——食べられる快感って、これだ。

——好きな人の中に転生できること。

——その希望。蕩けるような安心感。これが、わたしにとっての快感なんだ。

——傷口を舐めてもらったときに感じた、痛いけど、蒼泉の中に入っていけるイメージ。

「みずみずに食べられるなら、安心かな」

「——も安心の素材で出来ていますよ、と言ったあと、翼彩は、薄目になって恍惚とした笑みを浮かべながら。つい。自然に。」

「みずみず——大好き」

蒼泉の右手の指に、自分の指をそつと絡めてみた。

天女さまの指は、待つていたかのように、その病み上がりで弱々しい指を柔らかく受け入れた。

「私も、翼彩様が大好きです」

翼彩の両首筋から肩、肩から脇を通して骨盤まで、温かな刺激で満たされた気がした。

冷たい身体で熱いお風呂に入ったときに、全身がじわんと癒されるような、それでいて浸食されていくような、痺れる感じ。

それから何秒もせず、翼彩の全身の感覚という感覚が、絡み合う指先に結集した。

しつとりした指同士がたわむれ合うのが、すごくくすぐつたい。

わたし——なんだか戒を破っている気がする。

たまらなく恥ずかしいけれど、そんな気分になればほどやめられなくなる。

——どうしよう。このままじゃ、溶けてしまう。

——でも、こうして過ごしている今は、とびつきりいい時間。

——たとえ肉体が減びても、食べられても、こんな他愛もない遊びをした思い出がみずみずの記憶のなかに残るのならば、わたしは生き続けていることになる。

——わたしの存在が、わたしの過ごした人生の一部が、みずみずの心に転生して、一緒に生き続けていることになる。

——そう思えたから。

——誰に語り継がなくてもいい。

——みずみずの心の中にいられば、それでいい。

じやれあつていた遊び相手の指が、ゆつくりと止まる。

静謐せいひつな堂内の暖房が心地よかったのか、蒼泉は座布団枕に顎を乗せ、うつ伏せの姿勢ですつかり意識を失っていた。

鬼獣供養が終わるまで二日間もぶつ通しで寝ていた自分とは、疲労困憊の度合いが違うのだ。
ぼんやりと見える、蒼泉らしからぬあどけない寝顔を見て。

——せっかくのいい時間だから。

もう少しだけ、このまま二人で眠ることにした。

「おやすみ、みずみず」

絡めた指づたいに言葉を流し込むつもりで、夢でもし逢えたら、続きしようね——と、心の中で声をかけた。

窓の外に降り続く湿雪は、いつしか綿雪の様相を呈してきた。

厳しい寒さだと聞いたから、明日の朝には積もるかもしれない。

でも、ここだけはとりあえず暖かい。

ガーデンがあるから。八部衆レギオンの仲間がいるから。そして、みずみずとわたしが一緒にいるから。

どんなに冷たい風が吹き荒んでも、二人を包む空間の温度だけは、きつと失われない。

現世げんぜかどうかとも明瞭としない昏さのなかで、志げと晶良——絵馬の中の花嫁二人の眼差しが、今度は自分を祝福しているかのように見えた。

晶良の顔は——。

——やっぱり、笑顔になったんだね。

翼彩の意識は、曖昧模糊とした空間に溶けこんで。

羽毛に包まれたように、幸せな眠りに落ちていった。

△了▽

終章(眠る恋人)PDF版

発行日 2018年4月24日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
